



ニュースレター

若手研究交流会開催報告

The report of the pre-conference young researcher's meeting

松本廣直¹, 渡辺泰士², 小坂由紀子³, 樋口太郎⁴, 市村駿汰⁵, 高橋聡⁵
Hironao Matsumoto¹, Yasuto Watanabe², Yukiko Kozaka³, Taro Higuchi⁴, Shunta
Ichimura⁵, Satoshi Takahashi⁶

2024 年 7 月 22 日受付. 2024 年 8 月 9 日受理.

¹筑波大学 (matsumoto.hironao.gw@u.tsukuba.ac.jp)

²気象庁気象研究所, ³金沢大学, ⁴東京大学大気海洋研究所, ⁵名古屋大学

Abstract

2023 年 12 月 3 日～4 日に金沢大学にて第 9 回地球環境史学会が開催されたが、これに先立ち 2023 年 12 月 2 日に新たな試みとして若手研究交流会を開催した。本稿ではその開催報告を行う。

背景

2023 年 12 月 3 日～4 日に金沢大学にて第 9 回地球環境史学会年會が開催された。それに伴い、本学会における新たな試みとして、学会前日の 2023 年 12 月 2 日の午後に若手研究交流会を開催した。

この若手会の目的は、「コロナ禍で疎遠になった、異なる専門性を持つ PALEO の分野の若手研究者が交流し、将来の進路や共同研究について考える場を提供する」ことである。現在の PALEO の分野では、分析手法の多様化、理論モデルの発達や高度化に伴い、様々な手法を結びつけた学際的な研究が一般的となっている。その結果、異なる専門性を持つ研究者との連携がますます重要となっている。しかし、近年のコロナ禍においては、PALEO の研究に取り組む若手研究者や学生が、同世代と知り合っただけで気楽に研究について話す場が制限されていた。またそれに伴い、自身の進路について意識する機会がなかなか持てないという懸念もあった。本会はこ

のような背景のもと、若手研究者や学生が気軽に情報交換し、将来の進路を考える契機を提供するため、名古屋大学の高橋聡准教授からの提案を受けて、松本が発起人となり実施する運びとなった。2023 年 7 月 27 日から若手会の企画書の作成を開始し、月 1 回ほどの間隔で Zoom ミーティングを行い会の内容を詰めていった。

会当日

参加者は主に大学教員・ポスドク（10 人）、博士課程学生（10 人）であったが、修士課程学生（5 名）、学部生（3 名）の参加もあり、幅広い年齢層・キャリアステージの研究者が会した。当初は 10–15 名程度の参加を想定していたが、最終的には 28 名（うち運営 5 人）と想定より 2 倍近い方々が集まった。また、参加者の専門分野も、有機・無機分析、気候モデリング、微化石、同位体分析と多岐にわたっており、「異なる専門性を持つ学生が交わる場を提供する」という目標は達成できたと考えている。

若手会は、遠地からの参加者にも対応できるように 12 月 2 日の午後 1 時から開催され、「若手研究者同士の交流」、「将来のキャリアパス」、「今後の共同研究を考える」、という 3 つの趣旨を念頭に以下のプログラムに沿って行われた：

13:10 参加者の自己紹介

13:40 3 名の講師によるキャリアパスレクチャー

15:10 少人数の班に分かれたグループディスカッション

16:20 金沢大学の 3 名の教員によるラボツアー

17:30 懇親会。

キャリアパスレクチャーでは、大学教員、研究所の機関研究員、海外でのポスドク経験といった異なる特色のキャリアパスを歩んでこられた方々を招いて講演していただいた。一人目の講師の名古屋大学の高橋聡准教授は、大学教員としてキャリアを築かれる中で研究テーマをどのように選択し、それがご自身のキャリアにどのような形で活かしたかについて詳しくお話しいただいた（図 1 左）。二人目の講師の金沢大学の臼井洋一准教授には、研究所の機関研究員の立場から大学教員へと転職される中で感じられたことや、研究所独特の予算や中期計画などの仕組み、さらには組織ごとの特色の違いについてお話しいただいた。三人目の講師の琉球大学のシェリフ多田野サム助教（オンライン参加）には、リーズ大学での海外経験や海外で研究活動を行うメリットやデメリット、日本で大学教員に着任された際に考えたことなどについてご自身の体験を交えながら詳しくお話しいただいた。

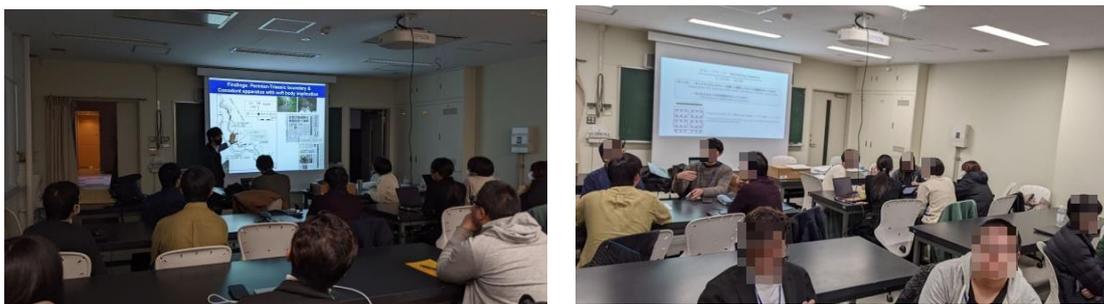


図 1. キャリアパスレクチャーにおける名古屋大学の高橋准教授による講演の様子(左)。グループディスカッションにおける議論の様子(右)。

グループディスカッションでは、6 人ずつの 5 つの班に分かれて自己紹介を行った上で与えられたテーマについて議論を行った(図 1 右)。はじめは、近い座席の参加者同士で班を組み、「キャリアパスレクチャーを聞いた感想・どのような進路がありうるか」「みんなどのような共同研究を行っているか?」という 2 点について議論していただいた。その後、開催者側で専門性や経験を考慮し事前に振り分けた班に分かれ、「地質・分析・モデル・古生物の研究者の共同研究がなぜ重要?」「このメンバーでどんな共同研究ができそう?」という 2 点について議論していただいた。それぞれのグループでの議論は自己紹介を含めておよそ 25 分程度の時間を想定していたが、想像以上に議論が活発に行われたため、かなり短く感じられた。

ラボツアーでは参加者が三班に分かれて金沢大学の長谷川卓研究室、臼井洋一研究室、佐川拓也研究室を訪問し、教員から研究室や関連設備について直々に紹介していただいた。この企画は、普段知ることが出来ない他の大学の実験設備や研究環境に触れることにより、今後の進学先およびポストク先として参考にして欲しいという思いで開催された。ラボツアーの最中には実験設備や研究内容について多くの質問が出ており、普段触れることのない他大学の研究設備について学べる良い機会になったと思われる。

最後に行った懇親会では、教室でピザや寿司をつまみながら参加者と交流する形式をとった。以上の内容を午後の時間だけで実施したのでかなりタイトなスケジュールとなってしまったものの、多くの参加者と交流し PALEO の研究者としてのキャリアパスを意識する契機となるような内容で実施することができた。

アンケート

環境史学会終了後に参加者を対象に以下の内容でアンケートを実施し、15 人から回答をいただいた。

- (1) 今回の若手会に参加されて、どう感じられたか

- (2) とくに気に入ったセッションは何か (複数回答可)
- (3) 今回の若手会で良かった点やその理由について
- (4) 今回の若手会で改善すべきだと思った点や、今後若手会を開催する場合に取り入れると良いこと、やってみたいこと

実施アンケートでは (1) の質問に対して、回答者全員が「非常に良かった」または「良かった」とする回答が得られた (図 2) ことから、若手会は概ね好評であったものと思われる。また、(2) 「本会で気に入った企画」については票が大きく割れた (図 3) ことから、参加者の多様なニーズにある程度応えることができたのではないかと思われる。

今回の若手会に参加されて、どう感じられましたか。(How do you feel about the pre conference young researcher's meeting?)

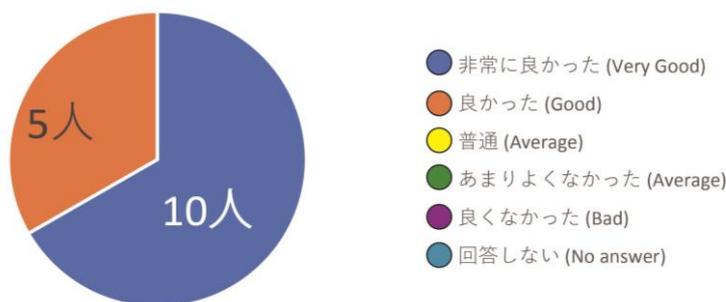


図 2. 若手研究交流会の満足度調査の結果(15人)。

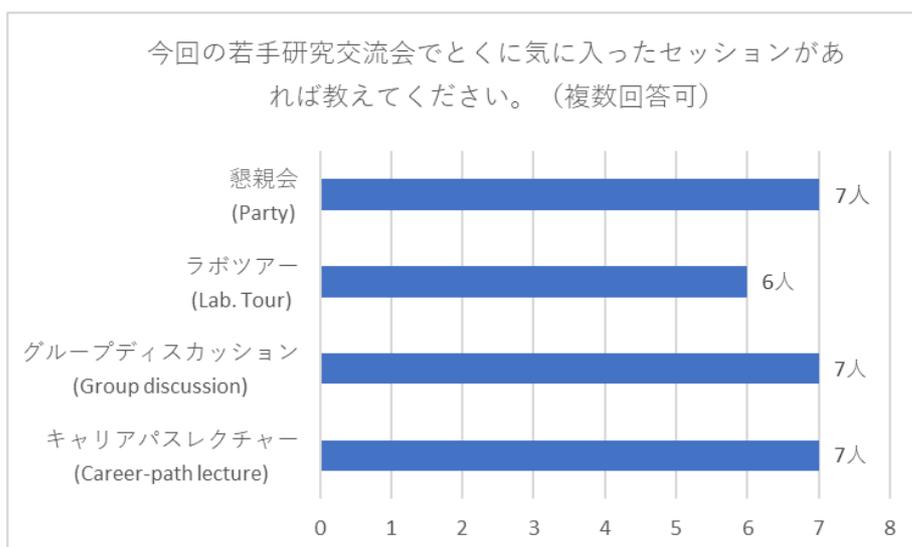


図 3. 若手研究交流会の気に入った企画についての調査(15人)。

(3) の若手会で良かった点に関しては「今後の進路を考える上で参考になった」、
「コロナ下で交流が少なかったので交友を深めることが出来て良かった」、「研究分野の異なる
人と情報交換が出来て良かった」、「他では聞けないようなキャリアパスの話を聞いて良かった」
といった回答があった。今回の企画で意識していた、若手研究者同士の交流・キャリアパスを考
えるという点がしっかりと伝わっており、こちらの狙いがしっかりと達成できているのを感じ
た。

(4) の改善点・今後やってみたいことに関しては、多様な意見をいただいた。特に
グループディスカッションに関して議論が白熱して時間が足りないという意見を多くいただい
た。こちらの想定としては簡単に自己紹介を済ませた後に各トピックに時間を割こうと思っ
ていたが、それぞれの研究紹介だけでかなり白熱した議論になり、時間いっぱい使ってしま
うことが多かった。今後同様な企画をやる際には単にそれぞれの研究紹介だけでも十分満足
できる内容になるのではないかと思う。また、グループディスカッションのやり方に関しても
「最後に他のグループが何を話していたのか共有の時間が必要」、「英語での交流はハードル
が高いので、留学生の組は博士課程以上にした方が良いのではないか」などの提案も
いただいた。今後の参考にしたい。

その他の改善点としては、「懇親会において、自分から話しかけるのが難しく、あ
まり話すことが出来なかった」、「アレルギーや宗教的な食事制限に関する質問事項を
設けて欲しかった」といった意見も寄せられた。こちらに関しては、企画者の至らぬ
ところであり次回若手交流会を行う際には改善したい。

総括

今回は地球環境史学会の若手交流会という初の試みであったが、概ね好評であり成功
だったと考えている。特に、若手研究者同士が交流し、キャリアパスを考えるきっかけと
するという運営メンバーの目的は達成されたと感じている。日本で PALEO の研究を
している学生同士が集まり、情報共有し様々なキャリアパスを知ることによって博士課程
に進む学生を増やすことに繋がることが期待されるため、今後も同様な活動を続けて
いくのが好ましいと思う。

また、今後同様な会を行うにあたって、いくつか改善点が挙げられる。(1) 準備や企
画には時間がかかるので、なるべく早く会の開催を決めて動き出すのが望ましい。今
回は 5 カ月前から動き始めたが、会の具体的な内容の決定や会場設備の手配等に時間
を要した。(2) 懇親会の準備、会場設備の確認には開催場所の研究者の協力が不可
欠であるため、学会側から現地協力者に打診する仕組みを作ることを提案する。今
回の若手交流会は金沢大学のスタッフや学生に参加していただき、食事の手配や手
伝い、机の数の確認といった準備を行うことで会を開催することが出来た。これら
の準備は開催場所の研究者の協力が無ければ成り立たないが、発起人が

自分のつてをたどってメンバーを探すのではハードルが高いように感じる。そこで、今後若手会を行う際には学会の正式な行事として、学会側からも現地協力者を探していただけると円滑に準備が進むのではないかと思う。(3) 会の内容に関しては自己紹介だけでもかなり盛り上がり、白熱するのでこの時間をもっと増やした方が良かったと感じた。細かな内容を指定せずに、自然と交流できる企画にするとさらに実りのあるものになると想像する。

最後にこの会を企画する際には、多くの方々の協力をいただいた。キャリアパスレクチャーやラボツアーでお世話になった金沢大学の長谷川卓教授、臼井洋一准教授、佐川拓也准教授、琉球大学のシェリフ多田野サム助教には心よりお礼申し上げます。また、会の開催のために会場準備に尽力していただいた金沢大学の学生の皆様にもこの場を借りて感謝申し上げます。